

2022年9月

No. 57

書道教室 薬院 一凛  
sho-do ICHIRIN

継続は力なり



月刊  
一凛



夢は美し〜がよい

希望は高きがよい

夢も希望も捨てなければ

必ず近づいてくる

目的は高きがよいそのための

一里塚として目標を設定せよ

〜そのために時を

刻むがよい



月刊一凛 No.57〈2022年9月〉

《競書審査員》佐々木峯雲

《発行》書道教室 一凛 薬院

《制作》野口昌芳(NS)



書道教室 薬院 一凛  
sho-do ICHIRIN

〒810-0022 福岡市中央区薬院3-7-25 原ビル2F  
TEL / 092-791-7251 FAX / 092-791-7786  
<https://www.shodo-ichirin.com/>

教えることは、二度学ぶことである（ジュベールの言葉）

知識には二段階あるといわれます。第一段階は人の話を理解できる程度の知識で、第二段階は人に説明できる知識です。人に説明して、その相手が理解できるようにするには、とても難しいこ

とです。中途半端な知識のままで教え

ちんとできるということは、「人の話を理解できる知識」が「人に説明できる知識」へと向上したと考えてよいでしょう。

ことについて初心者に教えるつもりになるか、あるいは実際に教えてみながら励むと、とてもよい学びになること

逆になんかを学ぼうと思ったら、その

教えることは二度

学ぶことである

佐々木峯雲



私が書道を教えるようになって今年で通算十七年目になります。最近はある程度指導の要領を得てきましたが、指導年数を重ねる度に「人に教える事の難しさ」を実感しています。また、「教えているようで、こちらが教わっている」と思わず苦笑いしてしまうこともしばしば。何かを人に教えることは簡単な事ではありませんが、教えるということとは相手のためだけではなく自分のためにもなるという事なのでしょう。書道教室一凛を始めて十三年経ちますが、残念ながら未だ指導者を輩出するまでに至っていません。私の指導を受けた皆さんは、日々の努力により技術を高め成長を続けています。今後は、皆さんの中から一人でも多く指導者を志す方が出ることを切に期待しています。

佐々木峯雲

35

年前になる。当時、宮崎県内の新聞社の支局勤務だった私の日課は午前8時半に所轄署へ行き、事件事故がなかったのかを確認することだった。事故の気配もなく、マスクミ対応をする副署長のところへ行くといわゆる活動服を着ていた。副署長は「御池で水難救助訓練ですわ。取材しませんか、私が乗る指揮用の船に同乗してもいいですよ」と言ってくれた。

暑い盛りに霧島連山の火口湖でもある御池で記事のネタを拾えラッキーという気持ちだった。署員がゴムボートで救助訓練をする様子を写真に納めた。さらに副署長がサーブिसで御池を一周してくれると浅瀬に木の棒が付いた金属が沈んでいた。

「あれ、何ですか？」と尋ねると、副署長も同乗していた署員たちも「手榴弾ですよ。旧日本軍の…」と教えてくれた。聞けば、旧日

本軍は宮崎の青島海岸への米軍上陸を想定し武器弾薬を宮崎県内の各地に集めていたという。しかし、敗戦が濃厚になり御池には手榴弾などを捨てたとのことだった。私が「国立公園内だしキャンプ場もあるから、危なくないですか？」という「そういえば何年か前にキャンプファイアーしてた子供が火にくべて爆発したな。けが人はおらんかったですよ」と親切な署員が教えてくれた。

苦いビールの話

私は支局へ帰り、水難救助訓練の記事と写真を送ることをデスクに連絡し、ついでに手榴弾の話をした。デスクは「へえ」と驚いて「写真を撮ったか？」というので「撮った」と答えると社会面にエントリーすると言ってきた。私もデスクもその段階では小さなトピックス程度と思っていた。本社の編集会議であれよあれよという間にトップ記事扱いとなり翌朝刊の社会面に大々的載った。私が書いた記憶がない「暴力団の手に渡ったら大変」と識者談話まで入っていた。

署に行くときと親切で水難救助訓練に誘ってくれた副署長はカンカンだった。現場の御池に行くときと東京からワイドショーのレポーターが大挙して押しかけていた。上空にはマスクミのヘリが飛び回っていた。レポーターたちは副署長にマイクを向け「発覚の経緯は？」と質問すると副署長が「あの人に聞いてください」と私を指差した。取材する側から取材される側になった。陸上自衛隊の爆

発物処理班まで来て、その時だけでも手榴弾15個を回収した。夜になって騒動が落ち着き、副署長に「恩を仇で返した。お詫びのために官舎に行った。署でも現場でも無然としていた副署長が「やはり来ましたね」と笑顔で部屋に迎え入れてくれた。ビールを開けてくれて「仕事だから仕方ありませんよ。大スクープに乾杯」と言ってくれた。あれほど苦かったビールは、いまだに飲んだことがない。

おかだ・ゆうき／昭和33年3月20日、北九州市生まれ。平成23年12月に一凛入門。趣味は自転車と酒を飲むこと。酒は誘われたら断らないがモットー。

墨を擦る

文・岡田 雄希

何気ない日常の、何気ないやりとり。

### さふらふ 5

拝啓、新涼の候

まだまだ残暑が厳しいですね。早く涼しくなりたいと思いつつも寒い季節も苦手だなと、わがままなことを思っています。

さて、先生が好きな季節はいつですか？

春はあけぼの。夏は夜。秋は夕暮れ。冬はつとめて(早朝)。と、清少納言が枕草子に書いているように、四季それぞれ「いとおかし(大変素晴らしい)」と思えます。

あえて選ぶとすれば「夏」です。誕生日が夏、夏の高校野球の大ファン、ビールが特に美味しいなどの理由があります。歳を重ねるにつれ何の脈絡もなくふと子供時代の事を思い出します。特に、世間の煩わしさなど知らず無邪気に遊び回っていた夏の出来事を思い出す度に、懐かしさに心が癒されます。このことも夏が好きな理由です。

夏が過ぎ風あざみ 誰の憧れにさまよう

青空に残された 私の心は夏模様(中略)

夏祭り宵かがり 胸のたかなりにあわせて

八月は夢花火 私の心は夏模様(中略)

夢はつまり 想い出のあとさき

井上陽水「少年時代」より抜粋

亡くなった母の実家は、平戸からフェリーで45分程のところに浮かぶ山大島。毎年、母と一緒に盆に帰っていましたが、そこはまさに絵に描いたような「田舎の農家」で、小学生の私にとって刺激的な世界でした。

祖母は上半身裸でうろろ、鶏は放し飼い、強烈な匂いの牛も数頭飼育、大きな沢蟹はうようよ、五右衛門風呂に、寢床は蚊帳の中。親戚の漁師に連れられて早朝船で沖に出て、アラカブやペウ釣り。夜中のイカ釣りも体験。海岸では

ピナヤウを探し。食事は、朝釣ってきたアラカブの味噌汁にサザエやアロビの刺身三昧。



少年時代になんと素晴らしい夏を過ごしていたのだろうと、母と母の田舎に感謝。まさに「私の心は夏模様」で、子供の頃の夏の思い出は大人になった今でも素敵な思い出として脳裏に焼き付いています。



COVER ART Miki Araki

## 9月分課題

9月分課題は10月10日(月)が提出期限予定です。諦めることなく、コツコツと努力することが何より大切です。みなさん、今月も頑張りましょう。

硬筆

かな

漢字

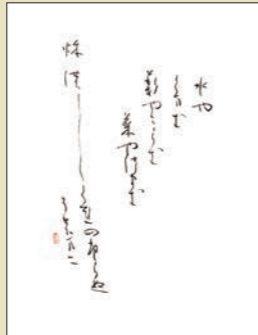
東大で造船学を学びのちに建築学に転向した建築家「耐震構造の父」といわれる内藤多伸が生で構造設計を担当した建築物は五百以上。その中でも最も美しいのは東京タワーだ。

初段以上

情報があふれる今は便利になり過ぎるが、なぜかという疑問を忘れがちだ。便利な世の中を否定はしないが、情報に流されるのではなく、うまく利用する力を付けることが必要。

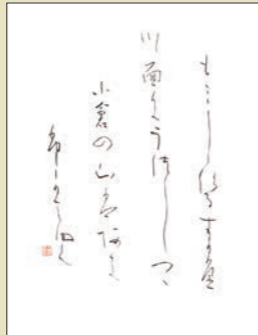
10級~1級

水やくまむ薪や伐らむ菜やつまむ  
秋のしぐれの降らぬその間に  
《良寛》



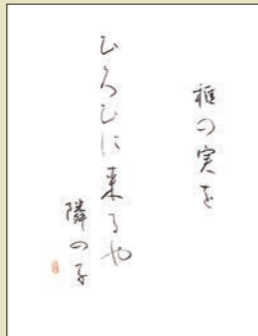
六段以上

紅葉する姿川面に映しつづ  
小倉の山は秋深みゆく  
《良寛》



初段~五段

椎の実を拾ひに来るや隣の子  
《正岡子規》



10級~1級

翰墨至寶



六段以上(篆書)



初段~五段(隸書)



10級~1級(楷書)

- 配布された手本に間違いがないか、上記課題一覧を必ず確認してください。
- 硬筆の添削に関して  
初段以上の方の添削は毎月1回限りとします。十分練習を重ねて仕上げた作品を添削依頼してください。

今月の硬筆課題は初段以上も楷書につき六段以上の方の添削は不要です。

いちりん で 伝える。いちりん で 繋がる。

イチリングラム  
Ichiringram



## 「書」の歴史を感じる街、京都をご案内

木曜日 Bクラス 藤嶋 菊乃

東福寺



洛西の嵯峨野では二尊院門前を抜け化野念仏寺に向かう途中に小さな手漉き紙で楽しくなります。洛西の嵯峨野では二尊院門前を抜け化野念仏寺に向かう途中に小さな手漉き紙

紙と織  
嵯峨野工房



屋さんがあります。手書の水彩で季節の草花を描いた和紙のはがきや、料紙(京都の伝統工芸黒谷和紙もたいへんお手頃にもとめることができます。店主のおばさんがはんなりした優しい京都弁で相手をしてくださいますので、おしゃべりも弾み、心も和みます。

祇園祭の山鉾巡行



京都は3年ぶりの祇園祭で賑わい、8月の大文字焼で夏の終わりを迎えました。秋の時代祭までは静かな日々が続きます。さて今日は私のふるさと京都の「書」にまつわるあれこれをご案内させていただきます。



京都の洛東にある優美な国宝三門で有名な東福寺の塔頭に筆塚で有名な正覚庵があります。別名筆の寺とも呼ばれ書を嗜む人に親しまれています。普段は拝観できませんが年に一度秋に筆供養があり多くの人が訪れます。護摩焚きで自分の使った筆や鉛筆を燃やして供養し、その煙を浴びると筆が上達するといわれています。この場所は祖父の家がある伏見稲荷にほど近く、子供の頃、お稲荷さんの赤い鳥居を駆け抜け遊んだことを懐かしく思い出します。

次は洛東から洛中へ。太閤さんがお造りになった修学旅行でお馴染みの寺町通りです。二条寺町通りには、お筆屋さん、お墨屋さん、紙問屋さんなどたくさんあります。老舗が立ち並びます。お店の屋号を書いた看板はどれも時代を感じさせ、それぞれの書体にも特徴がありますので見ていただけで楽しくなります。

